

# 笑いに関する日中対照研究

## －語用論と認知言語学の接点から－

梁 爽

「笑い」は英語では「ユーモア」ともいう。ユーモアは大統領などの正式なスピーチなどでも用いられ、コミュニケーションには不可欠な要素として幅広く用いられている。「ユーモア」や「笑い」が極端に使われるのは日本語には「漫才」、中国語には「相声」、英語には「ユーモアストーリー」などがある。何れも同じく人を笑わせるが、言葉の面から見た場合、それぞれの笑いの話術はどんな特徴があるかを、梁(2003)は、歴史的源流、表現の構造、笑いの言葉を通して分析を試みた。特に、笑いを誘い出す手段・方法を対象に考察し、井上(1981)による漫才の分類を軸にし、「洒落」、「悪態」、「ホラ」、「脱線」、「混線」、「へりくつ」、「真似」、「狡猾」という八種類を「相声」、「ユーモアストーリー」と対比させ、またそれ以外の特徴を二つずつ挙げた。

ところが、「漫才」にしろ、「相声」にしろ、ボケとツッコミが会話の形によって観客に面白おかしく感じさせ、笑いを誘い出すのである。これまでの先行研究を見れば、二つの傾向が見られる。一つは、笑い言葉の表層的な構造を分類したり、内容と形式を分析したりする研究である。もう一つは、グライス(1975)の協調の原理や関連性理論で笑いの背後に潜めている「笑いを誘い出せる」理由を論じる研究である。

しかし、認知言語学では、日本語は聞き手責任の言語、と言われる。つまり、送り手の意味が「おかしみ」であっても、聞き手次第で、それが「おかしみ」にも「皮肉」にも、「普通の話」にもなりうるのである。従来の「おかしみ」や「笑い」の研究では、送り手の論理だけで、話し手責任の言語である英語に基づいた語用論では研究には不足な点があるといわざるをえない。そこで、語用論と認知言語学の接点から分析することが必要となってくる。さらに、語用

論理論にしろ、認知言語学の理論にしろ、西洋から提示し始めた理論なので、果たして東洋の言語学にも適しているかどうか、また日中だけにおける「笑い」の生成過程にはそれぞれどのような違いが観察されるかということの本研究を通して究明しようとする。

従来の研究では、意味上、ポライトネス、発話行為理論、関連性理論、レトリックなど語用論的に「笑い」について分析されてきたが、そもそも、観客が笑わないと、「笑い」や「ユーモア」ではなくなり、言い換えれば、聞き手が送り手の語っている意味を期待される通りに「オチ」の内容を受け取らないといけな。本研究は、第三者(観客)が頭の中で笑いに対する生成過程を解明するために、Fauconnier (1997)が提示したブレンド理論 (Conceptual Blending Theory) に基づき、関連性理論を取り入れながら、認知主体の認知スキーマを描く。これにより笑いの深層的な構造、及び日中における「笑い」に関する認知言語学的な特徴の違いを明らかにする。

### 参考文献

- [1] 今井邦彦 2001『語用論への招待』大修館書店
- [2] 川崎隆章 2004「漫才の構成術」<http://radiofly.to/wiki/>
- [3] 小泉保 2001『入門 語用論研究—理論と応用』研究社
- [4] 高原修 林宅男 林礼子 2002『プラグマティックスの展開』勁草書房
- [5] 吉村公宏 2004『初めての認知言語学』研究社
- [6] auconnier, G. R. 1997. *Mappings in Thought and Language*. Cambridge, MA, Cambridge University Press.
- [7] Sperber & Wilson. 1986. *Relevance : Communication and Cognition*. Cambridge, MA : Harvard University Press.

りょうそう／北京外国語大学北京日本学研究センター 博士課程二年  
shuangzi\_liang@yahoo.co.jp